山折り

福祉文化通信

2017.3.31 Vol.82

～ Well-being への道～

●発行者／広報委員会
稲田 泰紀・関矢 秀幸
●制　作／長瀬 さやか

日本福祉文化学会事務局 〒305-0033 茨城県つくば市東新井 24-5 特定非営利活動法人 茨城 YMCA 内 Tel/Fax：029-896-9389 E-mail: fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp

OKINAWA
沖縄

現場セミナー2017 inおきなわ を終えて

沖縄福祉文化を考える会 会長 佐久本 真智子

2017年
2月18日(土)・19日(日)

寒緋桜が咲きほこる季節。2月18日（土）・19日（日）快晴に恵まれ、二日間のプログラムに遠路ご参加下さいました会員の皆様に感謝いたします。一昨年秋、日本福祉文化学会神戸大会に於いて沖縄での現場セミナー開催をお引き受けし、戸惑いもありましたが、学会副会長　岡村ヒロ子氏、事務局前嶋元氏の御支援の元、沖縄事務局　安里和子氏と会員が協力して当地での現場セミナーが実現しました。思えば十二年前に沖縄福祉文化現場セミナーを開催した折、一番ケ瀬康子会長の「21世紀を迎えて、福祉のあり方、文化の視点から福祉をみる」ことの大切さを力説されました。当会も会員数は減りましたが、会長、事務局長を中心に起動しました。

一日目プログラム

●現場セミナーテーマ『平和なくして福祉なし』学会の原点にもどり、再確認の場となりました。基調講演「戦争と福祉」では山城紀子氏の取材を通しての、エネルギッシュな講演。シンポジウムもテーマに添って薗田碩哉氏のコーディネートの元、山城紀子氏、仲地博氏、浅井春夫氏、結城俊哉氏、各シンポジストの話題提供。内容も深く、フロアとの対談等参考になったとの声があり、参加者の皆様から大好評でした。幸いに沖縄大学の御好意で教室を使用する事が出来感謝です。

●懇親会（於 那覇セントラルホテル）『福祉文化学会会員の皆様ようこそ沖縄へ』のご案内で、馬場清学会会長の開会の挨拶で始まり、続いて、沖縄大学学長沖地博氏の乾杯の音頭。琉球料理と泡盛で歓談に入り、琉球舞踊の解説と高嶺久枝氏（沖縄県立芸術大学教授）の「初穂」の舞へ。教授と学生の美しい古典舞踊、雅踊りを堪能し、交流の宴も盛り上り、最後に全員で『カチャーシー』を踊って初日の日程を終了しました。

二日目プログラム

●沖縄歴史探訪　久高島へ。那覇市より約一時間で南城市に入り、世界文化遺産「斎場御嶽（セーファウタキ）。この聖地は琉球王國の安泰と五穀豊穣を祈る国家的な祭事が行われてきた、沖縄を代表する聖地で、先人から守り受け継がれてきた、聖地での「祈り」は、沖縄の人々の生活や精神に今も生き続けています。

1時間で参拝を終え、次に、メインプログラムの歴史探訪・久高島へ。二月といえ、最高の晴天に恵まれ、波静かに、二十分の乗船。正午に上陸して、島の高台の広場で、昼食（月桃葉包みお弁当）とりました。久高島は周囲８㎞の細長い島。琉球を造った神、アマミキヨが最初に降り立ち、国造りを始めた地と伝えられ、神の島となり、島全体が聖地。霊地、祭事の行われる島となりました。静かで、美しい海、砂浜、平屋の佇まい、幾十年も前にタイムスリップした感じ。ちなみに住人は１７７名とのこと。自由散策後、徳仁港より本島の安座間港に着き、バスで那覇市中心部、県庁前にて二日間の現場セミナーを終えました。

御参加下さった皆様に感謝！この様なチャンスを与えて頂き、次世代へつなぎたいと思います。福祉文化学会の更なる発展を祈念して感謝のうちに幕をおろしました。

沖縄オプショナルセミナー報告 —— 学会事務局次長 阿比留 久美

1983 年に障害の有無を問わないあらゆる世代の人々の出会いの場である「土の宿」を沖縄・伊江島でひらいた木村浩子さんからお話をうかがいました。ご自身も重度の脳性まひをもちながら運動を続けられてきた木村さんがお話しされた、福祉は人間の怒りと直結しないといけないということ、問題だと思うことに対してはっきりと意見を言わないといけないということ、現在色々なところで目にも耳にもする「共に生きる」という言葉がこの世で一番大切であること…これらの言葉がずしんと胸にひびく貴重な時間となりました。

BUNKA NO KOUSATEN Hiroko OKAMURA-3-

文化の交差点③

私と沖縄文化 ～点から線へ～

日本福祉文化学会副会長
岡村 ヒロ子

＊2017年度は、2016年度「日本福祉文化学会実践学会賞」を受賞された『たまごの会』加藤美枝代表（福祉文化学会監事）よりご寄稿いただきます。どうぞお楽しみに♪

2月18～19日、沖縄現場セミナーが開催され、「戦争と福祉～沖縄を考える Part 1 ～平和の文化を育てるために」というテーマで学びを共にし、歴史探訪では沖縄発祥の地ともいわれる神の島、久高島を訪ねた。雲一つない青空、穏やかな海、白い波しぶきまでもが躍動感にあふれていた。その日、学会員とビースボートの仲間達で民宿「ちばい小」に宿を取った。夕餉は亜熱帯の花々に囲まれたウッドテラスで、涯山窯の器に盛られた心づくしの料理と泡盛を楽しみながら、学生時代のように熱く語り合った。

話題はもちろん前日のセミナーについてである。時折吹く夜風が心地いい。なんと贅沢な時間だろう。新聞記者だった友人が「沖縄は知れば知るほど分からなくなる。来るたびに沖縄の人が好きになるし、違和感はない。自分の価値観で沖縄の人々の気持ちを推し測ることは慎まないといけない。」と口火を切った。全く同感である。私は18年前、初めて沖縄を訪ねたが軒を並べるアメリカ風の店に正直、違和感を覚えた。「ひめゆりの塔」が歴史的に何を意味するのかも十分に理解していなかったし、沖縄の文化や歴史には、正直ほとんど関心を寄せてこなかった。沖縄担当を機に幾度となく足を運ぶようになると、膨大に広がる普天間・嘉手納基地に驚き、辺野古で高まる基地移転反対運動には圧倒され、伊江島などの激戦地跡や戦争資料館を訪れると胸が痛くなる。なにより、朝、突き上げるような地鳴りに地震でも起きたのかと思うほどのオスプレイの轟音に震感すると「なぜ、沖縄だけが?」と分からなくなってしまう。

この歳になるまでいったいどこに目を向けていたのだろうか。本を求め、むさぼり読むと沖縄の歴史が少しずつ、知識として入ってくる。しかし、それは点でしかない。線につなげたい、そんな思いが「また行きたい」という気持ちに駆り立てる。島の方々や文化にふれると「同じ日本人でありながら…」という気持ちは打ち消される。沖縄に限らず、日本中、どの県の人々もそれぞれに独自の歴史や文化をもっている。沖縄だけが特別ではない。こんなエピソードを聞いた。琉球新聞の会葬御礼の欄には喪主だけでなく縁のある人々の名が多く記載されているという。共同体の中で育まれた助け合いの仕組みがそのような形で根付いているのかもしれない。

セミナーで沖縄大学学長仲地博氏が結んだ「国境の壁はなるべく低く、小さく、弱くしたい。そのことが平和につながると思う」というお話が心に残った。国境を文化に置き換えれば「文化の壁は、なるべく低く、小さく、弱くしたい」となる。沖縄（うちなんちゅう）と大和（やまとんちゅう）にとっての福祉文化は、互いに違いを認めながら、双方が日本人として「何が」できるかを考えていくことではないだろうか。それを形にしていくことが、今、本学会に課せられた役割だと思う。

会員情報

●2017 年 2 月 27 日までに、ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせいたします。（敬称略）
村上佳司＊（関東ブロック）、山田貴史＊（関東ブロック）、ミルチャ・アントン（関西ブロック）
*2016 年 10 月 31 日時点で入会しているにも関わらず、前号発行時、お名前が未掲載でした。深くお詫び申し上げるとともに、ここに掲載いたします。

●2017 年 2 月 27 日現在
〈会員数〉
個人会員 303 名　　団体会員 7 団体

会費納入のお願い

学会運営は会費により支えられています。2017 年度の会費納入をお願いいたします。過年度分未納の方は早急に合わせて納入をお願いいたします。

山折り

谷折り

2016年度
日本福祉
文化学会

ブロック活動及び委員会活動

関東ブロック報告――梅津 迪子

「事例を通して人権問題を考える」

話題提供者　小林祐輔氏（みんなでたすけあう会支援者・障がいの当事者）
　　石井美寿輝氏（特例子会社にて、支援職及び障がいのあるスタッフ向けの研修等を担当）
コメンテーター　河東田博氏（浦和大学教授）

12月4日(日)立教大学池袋キャンパスにおいて、『関東ブロック研究交流会』を参加者 20 名で開催しました。

神奈川県相模原市の大量殺傷事件。埼玉県白岡市の菁莪小特別支援学級で教師が児童に暴力を振るい、骨折させて放置。鶴保庸介沖縄・北方担当相は「土人発言が差別であると断じることはできない」と語り問題になりました。こうした事件の背景に日本人の希薄な人権意識があるのではないでしょうか。障がいの当事者として小林氏、支援者の立場から石井氏が実体験をもとに問題提起をされました。いくつもの事例から浮かび上がってきたのは、障がい者と健常者が一緒の空間で同じように過ごしているときには「区別」がないのに、たまに顔を合わせる関係になると、障がい者が「特別な存在」、あるいは「特異な存在」になるということでした。

最後に、河東田氏から諸外国の障がい者施設の歴史・近代的成り立ち、差別と人権侵害（虐待など）は表裏一体であることがレクチャーされ、その中でも、隣人を「排除せず」「差別せず」「共に」生きることがあらためて強調されました。

北陸ブロック報告――渡邊 豊

福祉文化現場セミナー「これからの地域福祉文化を語り合う集い」

9月に開催した「集い」は、2004 年に新潟豪雨と中越地震、2007 年に中越沖地震を経験した新潟県を会場とし、日本地域福祉学会との共催により実施した。大島隆代氏(浦和大学)の基調講演に続いて、被災者支援に尽力された県内4つの社会福祉法人から当時の対応や現在の活動について学び、今後の活動について法人の地域貢献の観点からも考えた。

さらに、中越地震の際に全村避難となった山古志村（現在の長岡市山古志地区）を訪ね、復興の状況について「やまこし復興交流館おらたる」職員からお話しを伺い視察を行った。

また、日本福祉文化学会と日本地域福祉学会とが「集い」を共催することで、福祉関係学会の連携・協働の促進を図ることを目的に開催したものであった。関西からの参加もあり、参加者相互の情報交換や交流を深めることができたいへん有意義であった。

「集い」開催前の8月には台風による影響で東北、北海道が甚大な被害を受けた。さらに本県においては、12 月に糸魚川市駅北大火が発生し、復興に向けた取り組みが行われている。今後も継続した災害に関する実践・研究活動が求められることを痛感している。

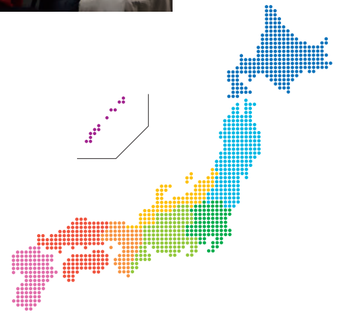
最後になるが嬉しい報告をしたい。集い1日目で報告のあった4法人のうちの一つ、長岡市（旧栃尾市）で保育園等を運営する芳香稚草園専務理事佐藤義尚氏から入会いただいた。これを好機に次回現場セミナーを同法人で実現することを夢見ている。

関西ブロック報告――脇坂 博史

1 月 27 日に研究会を開催し、平成 29 年度の活動を協議しました。今年度は、研究会の開催を、奇数月の6回に設定し、現場セミナー（福祉文化歴史の旅）、講演会なども原則その中での開催とすることにしました。これは参加者が予定を立てやすいことと、参加の負担を縮小するためです。

なお、研究会終了後ではありますが、2月の沖縄・現場セミナーは、参加した関西ブロックの会員に大きな刺激となり、「戦争と福祉」をテーマの中心とした集いを考察しようということになりました。

また「高齢者福祉日韓比較研究」も2年目を迎え、継続して研究を進めていく予定です。



東北ブロック報告――永山 誠

東北ブロックのセミナー開催を目指して

東北ブロックのセミナー開催の可能性を相談するために、2017 年1月 26 日宮城県石巻市を訪問した。石巻日日新聞記者、社会福祉法人経営者、コミュニティ・ワーカー等4名と面談しました。

セミナー準備としてのテーマを考えるために、石巻、女川をエリアにした震災復興の状況、被災後の生活状況、高齢者福祉の課題等について聞き取りを行った。被災者支援方法、ボランティアマネジメント、復興計画づくり等についてディスカッションをしました。

セミナー準備のグループづくりをしようとしたが、仕事がかわることがわかり、当面不可能であることがわかりました。再度の挑戦が必要ですが、次は会員のアンケートに取り組む予定です。

中・四国ブロック報告――松原 徹

第8回「総集編・歌で学ぼう岡山ＥＳＤ」

11 月 20 日、第 8 回「総集編・歌で学ぼう岡山 ESD」（オルガホール岡山）が 200 人満員で開催された。

岡山にはたくさんの文化遺産があり、岡山を支えた多くの偉人がいる。改めて岡山人が学び、知ることで、岡山に誇りを持ち、希望溢れる明日創りの一助を成すイベントを目指し、それぞれのテーマでゲストを招き7回開催してきた。今回は総集編として ESD をテーマに挙げた。ESD・直訳すれば持続可能な開発のための教育。世界会議が昨年岡山と名古屋で開催された。岡山には脈々と引き継がれているハード・ソフトの文化があるので、ESD の世界会議を岡山で開催できた事には大きな意味があると思っている。

①岡山は比較的水害が少ないのは、平安時代、妹尾太郎兼康による水道整備のお陰といっても過言ではない。後世、そこに発生したフナを使った郷土料理「ふなめし」は、児島湾干拓という偉業を陰で支えた。

②岡山発展のため宇喜多直家は、西大寺の富豪を現在の京橋付近に住まわせ、町を作らせたのが西大寺町という名の由来、後世、高度成長期の象徴である表町商店街に発展した。

③教育をもって備中松山藩の改革を行い、明治維新に大きな影響を与えた山田方谷の信念と知恵と行動力は、かつての教育県岡山の石杖といえる。

まさしく、今に引き継がれ、未来に引き継ぐ This is ESD。講演とオリジナルソングで、解りやすく楽しく、共に学んでいけるイベントを目指し開催した。ご講演の安井博様をはじめとする出演者は力いっぱいのパフォーマンスを披露した。そしていつもながら陰で支えてくださったスタッフの皆様のお陰で、大成功・大盛況だった。

研究委員会――佐藤 嗣道

4月からの「持ち寄りゼミ」

研究委員会では、今年度も「持ち寄りゼミ」を続けます。薗田顧問のご指導のもと、メンバーが様々なテーマを持ち寄り、福祉と文化の視点から検討する自由な意見交換の場です。4月からは、上野千鶴子「ケアの社会学」太田出版（2011）を何回かにわたり輪読します。この本の副題は「当事者主権の社会福祉」。ケアを相互行為と捉え、ケアの受け手と与え手の関係の非対称性を踏まえつつ「良いケアとは何か」を考察しています。そして、協セクター（官でも民（市場）でも私（家族）でもない市民活動によるセクター）の役割を検討し、ケアの未来を展望しています。新年度第1回は4月2日（日）午後（東京都内）です。

これまで参加されていない皆様もぜひ一緒に「持ち寄り」の輪に入りませんか？興味を持たれたら事務局までご連絡ください。

広報委員会――稲田 泰紀

日本福祉文化学会の活動をタイムリーに情報周知を行うために、『日本福祉文化学会メールマガジン』をリニューアルしました。
登録を希望される方は事務局まで連絡をお願いします。
（電話・FAX 029-896-9389　fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp）

●『オールサーバー』
http://ml.allserver.jp/about.jsp　を利用します。
●メール本文広告なし／広告メールなし
●登録は無料です。

谷折り